

津島修治の筆名を調べてみた。

大正十四年（一九二五） 青森中学校の交友会誌に津島修治の名で「最後の太閤」を発表。辻魔首氏のペンネームで「角力」を発表した。

大正十五年（一九二六） 同人誌「青んぼ」を創刊、「口紅」を辻島衆二の筆名で、そのほかの作品も発表。

昭和四年（一九二九） 弘高新聞に「鈴打」、「花火」などは小管銀吉の筆名を使った。

昭和五年（一九三〇） 「座標」に連載した「地主一代」には大藤熊太で、「地主一代」は「学生群」にも連載したが未完。

昭和八年（一九三三） 同人雑誌「海豹」の創刊に参加、

「海豹通信」（第四便）に「故郷の話（3）」を、はじめ太宰治の筆名で発表。また「東奥日報」の日曜附録「サンデー東奥」（二月十九日）に「列車」、三月、「海豹」創刊号に「魚服記」を発表。ついで「思ひ出」を連載している。

このように、筆名・太宰治になるまで四つものペンネームを使っていた。

戦後私は若い仲間たちと同人誌「灯」（昭和二十年十月創刊）を出していた。一周年記念号を発行するに際して太宰先生に書いてもらった「花を見る／花を思ふ 花を見ず／花を思はず」を表紙に飾ることに編集会議で決めた。編集会議と云っても、

「うん、文学の神様だ。と言ったのさ。」
「うん、文学の神様だ。と言ったのさ。」

みんなは一斉に不審な面持ちをみせた。

私は、「太宰治というペンネームだと文学の神様になれるのですか……」どうも納得がいけないと思った。

「平安時代の公郷で学者である『菅原道真』という人を知ってるだろう。（みんなは領^うずいた）菅原道真公は時の左大臣藤原時平らにねたまれ、九州太宰府に流された。今は道真公が祭られている太宰府天満宮は学問の神様として崇^{あが}められているはお前たちも知っているとおりだ。太宰治は、菅原道真にちなんで『太宰』、修治の『治』で太宰治というペンネームを名乗ったのだ。」

木立さんは、「どうだ、これはお前たちだけに教える太宰治のペンネームの由来だよ。」得意そうに言っ言葉を切った。

みんなは、何度も何度も頷^{うな}づいて感心した。
私は平成十年二月下旬五所川原市のT内科に入院した。当初風邪を引いて市販の売薬など飲んでいただけだが、十日経っても熱が下がらない。食欲がなく身体がだるい。老人の風邪引きは肺炎を起す心配があるというので、二十五日夜に注射の一本もすればよいだろうと軽い気持で家族の者たちに連れて行かれたのだが、診察を受けると点滴、入院となり、いろいろな検査の結果C型肝炎と診断された。一ヵ月ぐらいい居ればと自分では

山中利幸、阿部定一、沢田薫に私とほかに二人ほどあったが、ほとんど沢田薫と私を中心になっていた。「灯」を創刊する以前からいろいろと指導助言を受けていた木立民五郎さんに相談に行った時、

「ああ、それは好いな。太宰治の書いたものが「灯」に載せられるなんて、立派なものだ。」

——ところで太宰治のペンネームの由来を知っているか。」
いや、太宰治を知ったばかりで、^{ヤケ}源から出た人だとぐらいいり知りませんからペンネームの由来まではわかりません。

木立さんは、

「うん、そうだよな。誰も知らないだろう。ところがわたしは聞いたんだよ。太宰治というペンネームをどうしてつけたかと言うことを。どうだ、聞きたいか。……」

みんな聞きたいと言った。

「昨年の秋、太宰治が私のりんご園へ来て、二人で飲んだ時、『先輩は太宰治というペンネームはどうしてつけたのですか？』と単刀直入に聞いたんだよ。そしたら……」

木立さんはみんなの顔を見まわして、さも勿^も体^たぶったように「えへん——」と軽く咳^{せき}払いしてから、

「何んと言ったと思う？」

また一人ひとりの顔をのぞき込むように見つめた。

みんなは黙って首を横に振って「知らないっ。」

自分一人しか知らない秘密を、他の人にも漏^もらさなければ有難

思っていたが、二ヵ月、三ヵ月と長期化し、退院の許可がなか
なかおられない。

ある時、院長から「あなたは、作家の太宰治が疎開中に交流があったそうだね。新聞記者から聞きましたよ。」とベットの傍に立ち診察の後世間話やら金木の津島家の事など暫く話し込んでゆく事が度々あった。

十月の末の頃か、院長先生は「あなたに見せたいものがある。私も旧制弘前高等学校を出ているので同窓会で発行したこの本が送られてきた。太宰治の特集になっている。参考になるだろう。」と渡してくれたのは、「北溟第四号（平成十年九月三十日発行）」だった。それは「太宰治没後五十年」特集で、小野正文の詩。

桜桃に寄せて

めぐりくる月日はあれど

集いくる友はありとも

すべなしや君がおもかげ

年かさね遠ざかりゆく

なげけとて風わたる野に

つぶらなる桜桃みのる

酒くみて君あるごとく

宴せんバラもかざりて

ふるさとの清き誇りと
こもごもに文の名たたえ
やさしかる君をしのべば
晴れやらぬ水無月の空
があつて、すぐ下段に編集子のことばが次のように書かれて
あつた。

『（先輩津島修治（七回文甲）逝いて五十年。

あの特異な「太宰文学」と多くの謎を残して死んだ「人間太宰治」に対する関心から、その名声いよいよ高く、昨今のマスコミの報道ぶりはたいへんなものである。今年も六月十九日の「桜桃忌」には、郷里金木町でも三鷹市の禅林寺でも、多くのファンが集まり太宰を偲んだ。学生の卒論テーマに今も「太宰」を取り上げる若者が多いと聞く、新潮文庫の「人間失格」は数百万部を超え、瀬石の「心」を抜いてトップだという。

ある文士仲間の会合で、もし文学の世界でオリンピックが行われるとしたら日本の代表選手は誰だろうと話題になった時、井上靖が、それは瀬石や鷗外なんかではなく、さしずめ太宰治だろうと言ったそうで、太宰の鬼才を見抜いたこの評価を嬉しく思う。

太宰の死は「雨の玉川上水心中」として有名であるが、心中した山崎富栄の兄年一しちね氏が弘高六回文申まうだったことは余り知られていない。兄が弘高在学中に病死したことが彼女を太宰に近づける機縁になったという。

しよう。東大の支那文学に行った津久井信也が津島からペンネームの相談を受けた時、津久井がその親友の太宰友次郎の名をあげたのです。問い合わせで「ご覧なさい」と回答したので、山内氏は、私が「太宰」なる筆名の成り立ちに関係があるなら教えてほしい、との申し入れだったのである。そして私が「太宰」なる筆名の成立に関係している事柄について返信すると、折り返し十二項目に亘る質問書を送ってきて、私は更に回答した。

私が「関係している事柄」とは、次のことである。

——略

昭和七年九月から私は居を麻布の木村町に移した。そのころ津島も芝白金三光町の弘高の先輩飛鳥定城氏（二回文乙、五所川原出身）宅の一室に居を構えていた。津島は時々私に書いたものを原稿のまま見せてくれたが、『魚服記』もその家で見たことは確かである。私はこの稿を見て感動した。

そんなある日、津島は、ペンネームをつけようと思うがどんなのがいいかと言って、三つ四ついろいろな名を書いた。その時私は、こんなのはどうだと言って「太宰」と書いた。津島のその時の反応は、面白いね、くらいであったろう。私が太宰治が津島修治であることを知ったのは、昭和十二年「満州」の奉天の書店で『晩年』を手にした時であった。

山内氏が筆者の乞いによって筆写して送ってくれた結城氏の論稿のはじめには、山内氏の『筆名太宰治論私考』を次のように紹介している。「それによると太宰治という名前は『百官の

津島修治、生きておれば今年八十九歳。生前の彼を知る同窓生の思い出ばなしその他をここに紹介して、泉下の太宰治に鎮魂の花束を捧げたい。』

私はゆっくりと頁を繰っていくと「太宰治」のペンネームについての一文が目に入った。次に抜粋してみる。

『「太宰治」のペンネームについて

八回文乙 津久井 信也（故人）

昭和四十二年八月二日の消印のある一通の速達便を、私は明石の山内祥史という未見の人から受取った。その冒頭を引用すると、「拝啓、このようなお便りを差し上げます失礼お許しください。実は私、審美社刊の雑誌『太宰治研究』第八号に『筆名太宰治論私考』なる文を発表した者でございますが、この文の発表後、種々の異説に接しました。その一つに、結城亮一氏の『太宰治』という筆名』（「山形新聞」昭和四十二年六月十八日）という文章には……」として結城氏の一文の概略を書いている。そして私に手紙を書いた理由を述べ、山内氏が結城説について意見を神戸市在住の石上玄一郎氏（本名上田重彦、弘高七回文乙、作家）に尋ねると、彼は「太宰なる筆名は弘高当時の一学生太宰友次郎君からヒントを得たことは確かだが、弘高時代津島は太宰君とは何の接触もなかったため、結城氏の説話は余りにうがち過ぎていて、おそらく聞きかじり屋の捏造で

長となって統治するということで、あらゆる文学者の長となつて文学界を統治するという据傲な矜持の体現とみることができるといい、また『ドイツ語のDASEIN（存在する）をもじったと同時に、日本語の墮罪をもじったものだろう』という。

略——

そして結城氏は、太宰（友次郎）さんと津島との出会いを次のように書いているのである。「ある時寮の部屋を出ようとして太宰さんが戸を開けると、入口のところに背の高い男が立っていた。彼は友次郎氏を見ると親しげ表情を、深々とおじぎをした。それから何も言わず廊下を立ち去っていった。これが津島修治だった。津島は入口の太宰友次郎という名札を見ていたのだ」と。

略——

しかし結城説は簡単に崩れる。それは津島の入学した年（昭和二年）には、太宰（友次郎）さんは一年以上級の高橋祐次氏（五回文乙）らと寮を出て、新寺町の月峯院に下宿しているの、寮で津島と出会うはずはない。

山内氏は結城説に関して直接太宰（友次郎）さんに手紙でいろいろ質問しているが、太宰さんは津島とは結城氏の書いている状況で寮で出会ったことは全然ないと答えている。

私は北浜寮に満三年住んでいたが、結城説のように津島が寮で飯を食ったり風呂に入ったりすることは、勿論見たこともなければ、想像することもできない。津島は当時一般の学生とは

全く異質な生活世界に浸っている人間であったのである。

(弘高同窓会「南を語る」から抄録)

〔注〕

一、略

二、ペンネームの由来は？との女優関千恵子のインタビューに答えて太宰は次のように言っている。(昭和二十三年二月九日三鷹の自宅で)

「特別に、由来だなんて、ないんですよ。小説を書くとき、家の者に叱られるので、雑誌に発表するとき本名の津島修治では、いけないんで、友だちが考えてくれたんですよ。云々」と。

このとき関千恵子を相手にしゃべった太宰の話は実に面白い。人間太宰を知る上で興味ある内容なのでここに掲載する。(『大映ファン』昭和二十三年五月号より)

以下略

太宰治の筆名については、今まで、疎開中に木立のりんご園で、飲みながら木立さんに語ったという「九州太宰府に流された菅原道真にあやかっつけた」ということを信じていた。しかし、玉川上水投身心中の日より約四ヵ月前に女優(「看護婦の日記」原作パンドラの匣―主演女優)関千恵子の質問に答えたのは、「友だちが考えてくれたんだよ」とのこと。

いとはこのことであるのか。

秋の日りんご園で聞いた太宰の声がよくえってくる。

——略

「学問の神様がいる」

とスラリと言っている太宰。私はその神様にちなんで「太宰」とつけたのさと告白する太宰の神経。

文学の神様になるんだぞという自己激励の暗示なのか？津軽人の心には津軽人の前でホラを吹くことの方が謙遜以上にピタリとくることがある。

遠慮のいらぬ後輩の前ではなおさらのこと、私の心にはすんなりとそのペンネームが先輩津島修治にふさわしく響いた。——略

死後、太宰のペンネームについての論説に幾度か触れてあるが、どれも一説があつて面白い。と結んでいる。

太宰研究、論評、また太宰と面識のない人までがその作品を読んでの太宰像を築き、いろいろ本に出している。

私は平成九年九月十七日金木町太宰会(木下巽会長)の求めに応じ、金木中央公民館で「疎開中の太宰治」という題でお話をすることがあります。(内容は、かたりべ第十二集『追憶・太宰治断片』)それ以前太宰に関する本(本人の著書以外の単行本、雑誌に掲載されたもの)はどのくらいあるものだろうかと思ひ、青森県立図書館に行き、検索してもらったところ二七

参考までに木立民五郎さんが、平成四年六月三十日洋々社発行「太宰治・第八号」に「太宰治が語った筆名の由来」が掲載されている。

——略

在りし日の太宰と近づきになり、ふとそのペンネームの由来について、本人に問うたことがある。

略——

「先輩のペンネームはどうして『太宰治』なのですか」
太宰は照らうふうもなく、
「遠い昔、学問の神様と謂われた菅原道真を知ってるでしょう。時の朝廷から九州太宰府に配流された神様にあやかっただけ」

と云って酒杯を空にすすぐ酒を注ぐと、
「京の都から九州に流された道真に似ていないか？」
と私の顔をのぞき込むのであった。

私は太宰の顔をつくづく眺める。菅原道真もこんな顔の人であつたらうかと単純に連想したものだった。

——略

太宰のペンネームについてはこれっきりであった。私にはこれで十分であり、パズルの謎はことごとく解明されて爽快であった。

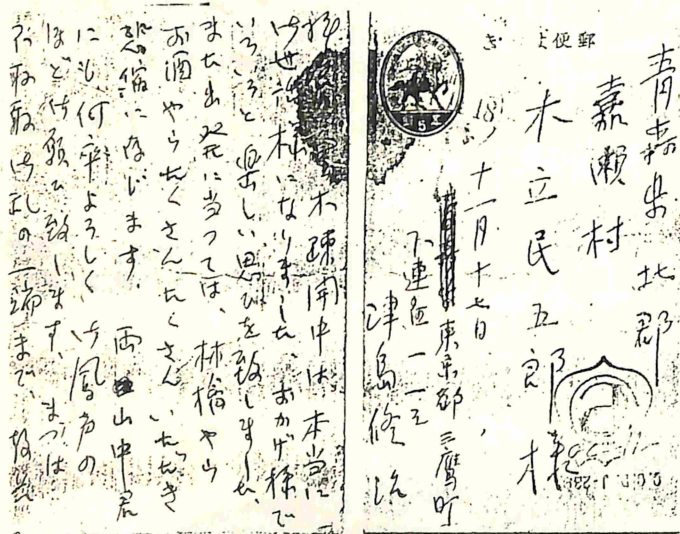
後日、太宰のペンネームについて太宰研究の評論家、作家のさまざまな考察など目に触れることもあるが、片腹痛

四件(冊)もあった。

筆名太宰治についてはもう本人に確かめる述もないし、私たちに最初に教えてくれた木立さんも平成六年十月一日故人となっている。

いずれにせよ本人の口から出たという「友だちが考えてくれたんですよ。」と「九州太宰府に配流された神様にあやかっつけた」ということは、津久井信也のヒントで菅原道真のようにとの心が生み出したものではないでしょうか。

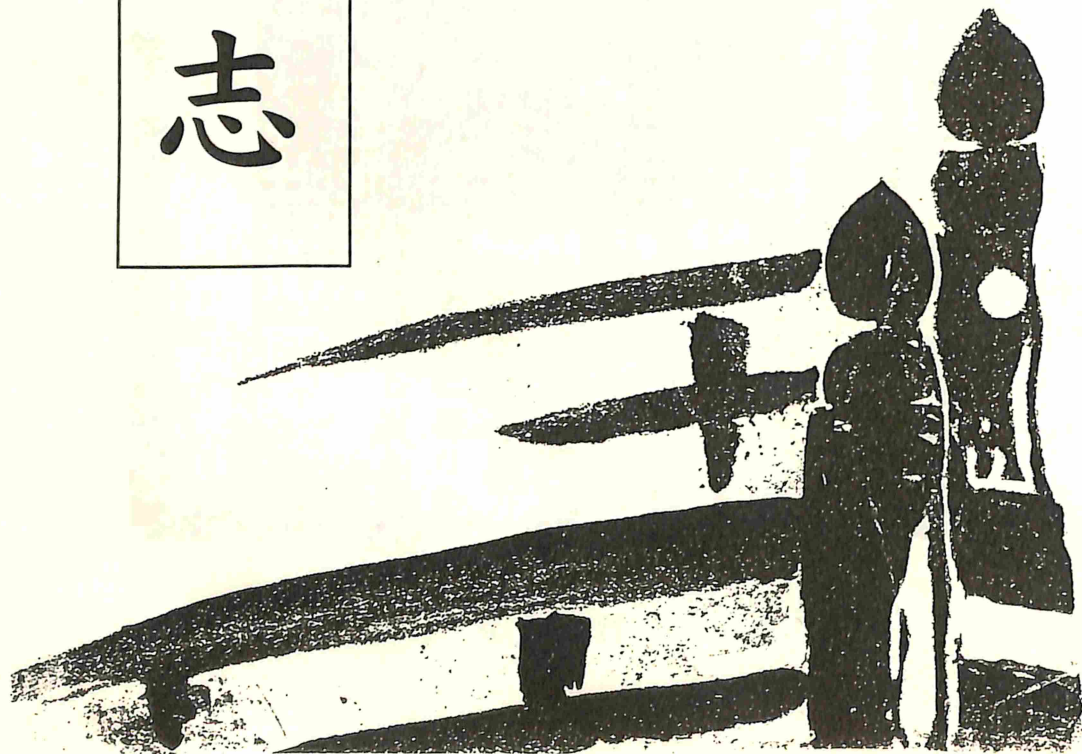
——終——



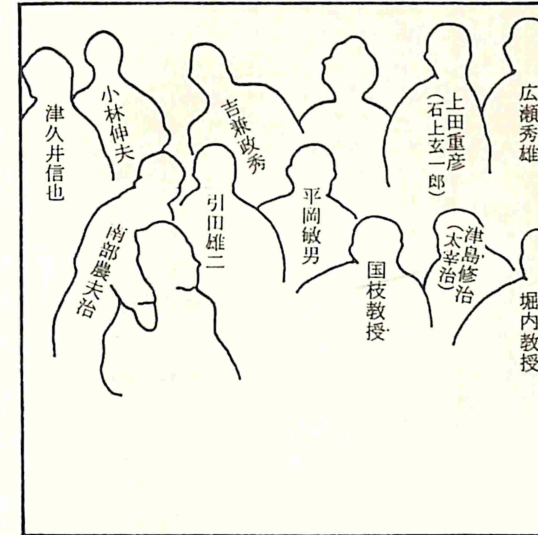
(注)太宰が金木から三鷹へ帰った時の礼状。文中に両山中君とあるは山中利幸、山中正津のことである。

復刻版

金木村志



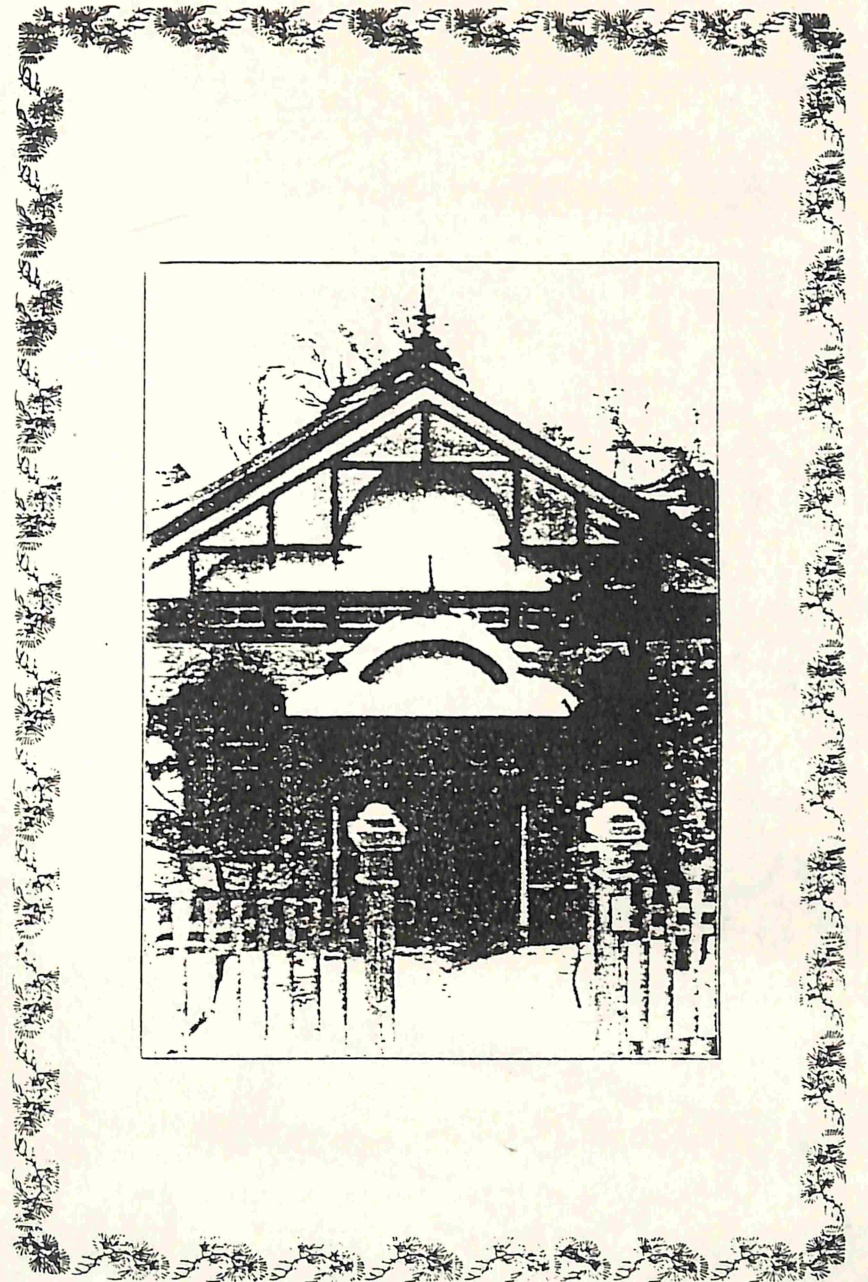
弘高「新聞雑誌部」の卒業生送別会（昭和4年2月）



〔編集子注記〕

- ★津久井信也 8回文乙（大正15年入学、昭和6年卒。在学中蟹工船にも。）
東大文支那文 満州国吉林省総務科長、浦和高校国漢教師など。楸文の大家。ピアノを弾き油絵も画く文人。ペンネームを考えていた津島修治に“太宰はどうだ”と薦めた人。同氏作詞作曲の北溟寮讃歌（昭52）あり。平成7.1.1.没。88歳。
- ★小林伸夫 7回文甲 京大経 昭和電工 戦時中阿波丸で帰国途中遭難。
- ★吉兼政秀 10回文甲 京大経 オリパス光学工業取締役など。没年不明。
- ☆上田重彦（筆名・石上玄一郎、いしがみげんいちろう。“いそのかみ”ではない。）7回文乙。
大阪成蹊学園教授ほか。著書に「太宰治と私」「精神病学教室」「自殺案内者」「黄金分割」「さまよえるユダヤ人」「輪廻と転生」「エジプトの死者の書」ほか多数。「新潮」1998/7月号の太宰特集に『惜別の句』の寄稿あり。関西弘高会にも出席（平成9年春）されてご健在。
—（6回？）詳細不明なるも平岡氏と同期か。
- ★広瀬秀雄 7回文甲 東大経経 北海道庁労働部長、道労働金庫理事長等。 昭和61.9.23没。77歳。
- ★南部農夫治 6回理乙 新潟医大 没年不明。
- ★引田雄二 6回文甲 東大経経 太宰と同じ明治42年9月生れ。 小学校5年から旭川中学に。
大正14年中学四修で弘高に入学。昭和4年卒業。 毎日新聞社社長、会長ほか。
弘高同窓会会長として昭和55/10月（創立60周年）と昭和60/4月（創立65周年）の記念祭を挙行。俳号北洋子、「生き残り社長となりぬ原爆忌」の句あり。奇しくも原爆忌に逝く。
昭和61.8.6没。77歳。
- ★津島修治（太宰治）7回文甲 東大文仏文 作家 昭和23.6.13.没。39歳。
- ★国枝俊文教授 独逸語 在職昭和2年—昭和10年（演劇部顧問）
- ★堀内尚同教授 独逸語 在職大正10年—昭和7年（文芸部顧問）

※平成10年9月30日発行 北溟第4号「太宰治没後五十年」特集より



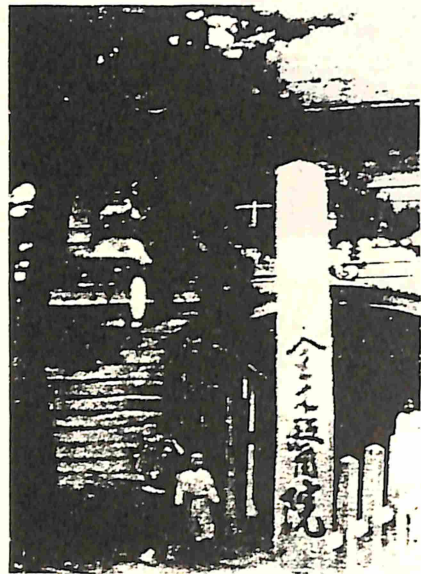
行銀木金

序

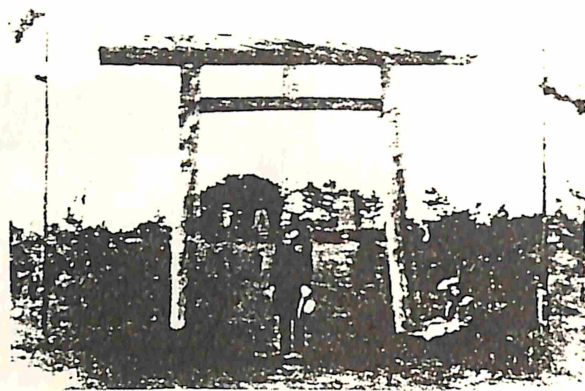
史の重ずべき今更言を俟たず制度の変遷風教の盛衰産業の興廃等其の因つて来る所を審かにする一に史に依らざるはなし然りと雖世間史の行はるるもの多くは一国一藩の沿革を記するに止まり一郷一村の事蹟を敘したるもの殆ど稀なり此の故に近く其の郷里に遺蹟の模すべきもの遺徳の欽すへべきものありと雖世に傳ふるに至らずして後人の事に従ふもの却て範を遠きに索めんとす是豈経世の一大缺點にあらざらんや方今地方自治の開發は朝野の共に唱道する所にして而かも之を図るの道は能く地方の事蹟に鑑み其の慣行に考へ以て適切な施設を講ずるに在り金木村有志の村志を編纂する其意盡し此に外ならざるべし聊か所感を述べて序言とす

明治四十四年十月下浣

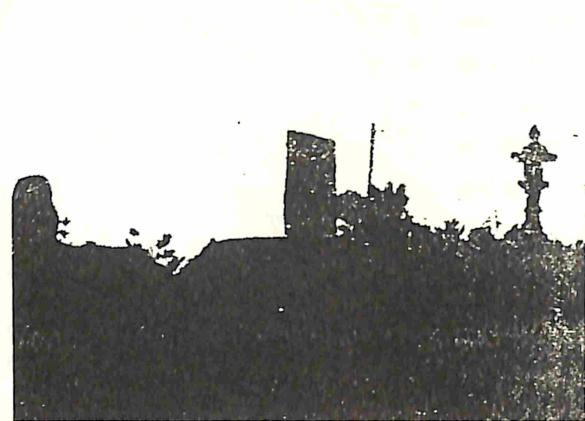
正七位勳六等 樋口 兵次郎



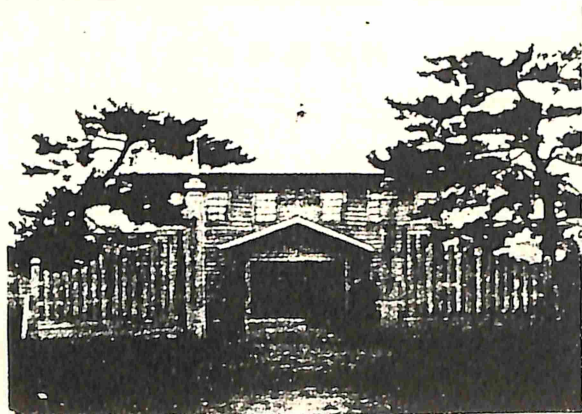
金木村議事堂ト金木病院



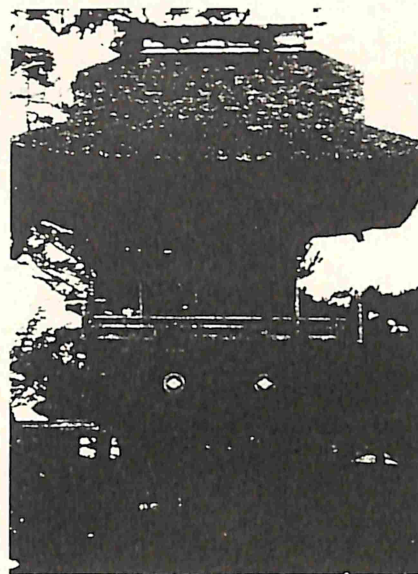
金木村招魂堂（其一）



金木村招魂堂（其二）



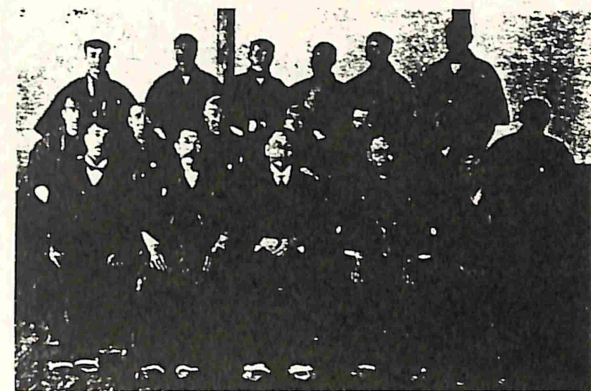
明治高等小学校



雲祥寺楼門



郷社八幡宮拝殿



金木村善行者表彰記念



賽の河原之景